

日本キリスト教会 大阪北教会
2018年5月13日『母の日』親子合同礼拝

聖書 詩編121篇 (新共同訳聖書)

1. 都に上る歌。目を上げて、わたしは山々を仰ぐ。
2. わたしの助けはどこから来るのか。わたしの助けは来る 天地を造られた主のもとから。
3. どうか、主があなたを助けて 足がよろめかないようにし
まどろむことなく見守ってくださるように
4. 見よ、イスラエルを見守る方は まどろむことなく、眠ることもない。
5. 主はあなたを見守る方 あなたを覆う陰、あなたの右にいます方。
6. 昼、太陽はあなたを撃つことがなく 夜、月もあなたを撃つことがない。
7. 主がすべての災いを遠ざけて あなたを見守り あなたの魂を見守って下さるように。
8. あなたの出で立つのも帰るのも 主が見守ってくださるように。今も、そしてとこしえに。

説教「 おかあさん いつも ありがとう 」

◆只今ご一緒に歌いました讃美歌 493 番、旧の 312 番の「慈しみ深い」は、教会内外で一番愛され、歌われている讃美歌ではないでしょうか。作詞家のジョウゼフ・スクライヴンさんは、1819年にアイルランドに生れ、1886年8月10日にカナダで召されます。首都ダブリンのトゥリニティ大学を卒業した後、一人のクリスチャン女性と出会い婚約します。ところが結婚式の前日、その婚約者が友人たちと乗っていたボートが、突然の暴風で転覆し、命を落とします。ジョウゼフは、失意のどん底に突き落とされました。この経験の後、彼は、主イエス様に全生涯を献げる決意をなし、25歳の時、アイルランドからカナダの東部にあるポートホープに移ります。そこで学校の教師をしながら、イエス・キリストを人々に伝えるため、献身的に働き、「ポートホープの善きサマリア人」と呼ばれたそうです。その後、41歳の時新しい出会いがあり、結婚することになったのですが、今回もまた婚約者を肺炎で失います。故郷アイルランドのお母さんは息子の不運を思い病の床に伏します。その知らせを受け、お母さんを慰めるために送った手紙の中にこの詩が入っていたそうです。1886年、彼は体調をくずし、友人宅に引き取られ療養していましたが、ある日近くの湖畔で祈ろうとして外出し、誤って用水路に落ちて流され、湖で発見された時は、手を組んで祈っている姿だったそうです。

◆いずれにせよ、今日このように「母の日親子合同礼拝」を共にささげることが出来ますことを、まず神様に感謝いたしましょう。今日は、子供達は学校行事やその他で少ないのは残念ですが、こども代表の出席があるのは嬉しいことですね。いずれにせよ、親子が揃って神様を礼拝できることにまさる幸いはありません。こちらから見ていますと、お祖母ちゃん、御祖父ちゃんと三代で出席の御家族

もおられます。嬉しいですね。5月の第2日曜日を「母の日」としてお祝いするのは、アメリカの習慣ですが、日本では5月5日が「こどもの日」で、国民の祝日に関する法律第2条には、「こどもの人格を重んじ、こどもの幸福をはかるとともに、母に感謝する日」となっています。

◆この中之島には今のところ小学校も中学校ありませんが、直ぐ近くの扇町高校の跡地に、公立の小・中一貫校を建てる計画があるように聞いていますし、隣りのN4タワーは350軒、今春入居の国際会議場の西の日本一高いマンション、ザ・パークハウス中之島タワーは900軒あると聞いています。合わせると1200軒です。多くの子供が集まることとなります。次の機会には、中之島在住の多くの親子がそろって、大勢で「こどもの日」と「母の日」のお祝いをしたいものですね。

◆さて、今日ご一緒に読みます詩編121篇は『都もうでの歌』(120篇～134篇の15編)と呼ばれているものの一つです。これはイスラエルの三大祭、春の「過越祭」・夏の「七週の祭」・秋の「仮庵の祭」の際に、各村々で巡礼団を組み、エルサレムの神殿に詣でるのですが、その出発に際してこれを歌って送り出し、また道中これを歌い交わして旅の無事と、村に残る家族・同族の無事を祈る歌です。今回この詩編121篇を母の日親子合同礼拝で読むようにと導かれたのですが、それはこの121篇が、子供の幸せ・幸いを祈る「母の祈り」に思えたからであります。上で述べた讚美歌「慈しみ深い」の作者ジョウゼフ・スクライヴンにもみられるように、本当に人生、いつ何が起こるかわかりません。子供の安全と成長ためには、どんな犠牲も厭わないのが母の愛ですが、人間は絶対ではありません。そのような時、天地を造り、これを支配し、導かれる、創造者なる神様の御手に全てをお委ねするしかありませんし、それが最善です。そのような思いで母は都詣に出で立つ、家族や子供たち、同族の無事を祈る。そのような祈りとしてこの詩編121篇を読むことができますと思います。子供のこれからを思う時、幾つもの越えて行かぬべならない困難、山谷を思わないではおられません。しかし、天地を創造された主なる神様は、まどろむこともなく眠ることもなく見守って下さるのです。それ故に、子に対しても同じ配慮を寄せてくださることを確信しないではおられません。願わくば、子もまた、この母と同じ信仰をもって、これからの人生の旅路をおくって欲しいと父母は心から願うのです。

◆この詩編121篇を歌い交わしては、神様に感謝し、旅にある同族の人々の無事を祈る。また、故郷にいて無事を祈る家族のことを神様に祈る。それがこの121篇です。勿論、詩編第23篇も歌ったにちがひありません。そしてわが大阪北教会の愛唱聖句、「ヤハウエ・イルエ」＝「主は備え給う！」「主は顧み給う！」も唱和し、また「117篇」も、唱和したことでしょう。そもそも「過越祭」は、あの「出エジプト」のあの解放・救出を、特に覚えての祭りであります。あの奇跡というほかない神様の御業がなければ、イスラエルの今・此処はなかったのです。「祭り」というものは、非日常的なものです。日常の生活・習慣を中断するものであります。そして、そもそもの自分の原点、原体験を想起し、そのようにして、日常生活を活性化するための知恵であり、神様のご配慮なのです。

◆ルカによる福音書の2章41節以下に、12歳の少年イエス様が、ご両親と一緒に過越祭のためにエルサレムに上られた時のエピソードが記されています。エルサレムでの祭りを終えて、ナザレの村への帰途につきます。一日路を歩いて、ご両親が、「イエスは何処にいるかな」と探します。ところが、イエス様の姿は、一行のどこにも見当たりません。そこで両親は、3日かけて探し、探しエルサレムに引返します。すると何とイエス様は神殿の境内で、学者たちの真ん中に座って、論議しているではありませんか。そこでマリアさんは、「なぜこんなことをしてくれたのですか。御覧なさい。お父さんもわたしも心配して捜していたのです」と、母親丸出しで、イエス様をたしなめておられます。母親の心配と安堵感が溢れています。するとイエス様は、「どうして、わたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか」と答えます。「父」とは「父なる神様」の事です。イエス様は信仰者としては早や一人前になっておられたのですね。人生のいかなる試練にある時も、父なる神様の見守りの真下にわたしたちはあるということを、教えてくれる、すばらしいお話しです。

◆「母の日」がアメリカで祝日になったのは1914年のことです。それは、1907年5月12日に、アンナ・ジャービスという女性が母の召天記念会を教会で行ない、出席者全員に白いカーネーションを配りました。因みに、白いカーネーションの花言葉は「純粋な愛」、ピンクのカーネーションは「熱愛」「美しいしぐさ」、赤いカーネーションは「母への愛」などとされています。このようなきっかけでアメリカでは、5月第2日曜日が「母の日」となったのですが、アンナ・ジャービスは後年、「母の日」廃止運動に取り組んだと言われます。それは「母の日」の行事が、商業主義に毒されて、何でもかんでも、金もうけにつなげるようになってしまったからです。日本でもその感がありますね。母の愛、神様の愛は、自己犠牲の愛です。己が身を犠牲にしても、人を守り、子供を守るところの犠牲の愛です。今日、何処の国もこの精神を回復し、保持しなければなりませんね。

◆「母の日」と云えば、アメリカ第16代大統領のエイブラハム・リンカーンのことを思い起します。リンカーンは貧しい開拓農家の出身でした。お母さんはエイブラハムに遺産らしき物を何も残すことはできませんでした。残すのは聖書1冊でした。しかし、よくよく考えれば、親が子に残す遺産として、これ以上のものがあるでしょうか。これで十分ではないでしょうか。「聖書1冊、詩編1篇。聖句一つ、お母さんは、この一つで、幸いな人生を送ることが出来ました。子供たち、あなたがたも、この一つで幸いな人生を送ることが出来るのですよ。」そのような確信のもとに、子供達を、神様の御手に御委ねすることに優る以上の事を、母は子にする事はできません。リンカーン自身も後にこう言っているようです。「私は聖書を、神様が人間に下さった最高の贈り物と信じている。」因みにアメリカの第45代現大統領のトランプさんは、2017年1月20日の大統領就任式の宣誓の時、2冊の聖書に手を置いて宣誓したと言われています。1冊はリンカーンの聖書、もう1冊はトランプさん自身

がお母さんからもらった聖書、この2冊の聖書の上に手を置いて、大統領の職務を誠実に果たすことを誓ったのです。

◆先日も少しお話した事ですが、あの「荒城の月」を作曲した瀧廉太郎は二十歳の時に洗礼を受けております。1879年(明治12年)8月24日に現東京都港区西新橋で生まれました。15歳で東京音楽学校(現:東京藝術大学)に入学し、1898年に本科を卒業し、研究科に進み、1900年10月7日に東京市麹町区(現:千代田区)にあった聖公会グレース・エписコパル・チャーチ(博愛教会)で洗礼を受けてクリスチャンになります。1901年4月、日本人の音楽家で2人目となるヨーロッパ留学生として、5月18日にドイツのベルリンに到着。さらにライプツィヒに向かい、ライプツィヒ音楽院(設立者:メンデルスゾーン)に入学しますが、わずか5か月後の11月に肺結核を発病し、現地の病院で入院治療しますが病状は改善せず、帰国を余儀なくされ、1902年(明治35年)7月10日にドイツを立ち、ロンドンを經由して10月17日に横浜に着きます。その後は父の故郷である大分県で療養しますが、1903年(明治36年)6月29日午後5時に大分市稲荷町339番地(現:府内町)の自宅で死去し、弱冠23歳でした。そしてあの名曲「荒城の月」のメロディーが30年位前からベルギーのギリシャ正教会の聖餐式の賛歌になっているということをごく最近知りました。

◆今回この「荒城の月」のメロディーに、この詩編121篇を乗せてみました。歌詞の長さが丁度4番に納まるのです。昼食・祝会時にご披露いたします。みんなで歌ってみましょう。いずれにせよ、親子・兄弟・一族が、この詩編121篇を共に歌う姿こそ、幸いそのものであります。人生には、思いがけない試練がつきものです。しかし12歳のイエス様が言われましたように、いつ、いかなる時も、わたしたちは父なる神様の家にいること、そして常に、永久に、その御顧みの中におかれていることを感謝いたしましょう。そして、全ての愛する者を、天地を造り給いし神様の御手にお委ねして、安んじようではありませんか。

◆お祈りいたします。

憐れみ深い主イエス・キリストの父なる神様。今日、このように、母の日親子合同礼拝を御前に捧げることができましたことを心から感謝いたします。あなたの御愛は限りなく無辺であります。私たちのいかなる感謝、讃美も、御愛に対応し得るところではありません。わたしたちに関わる全ての事を、あなたは顧みてくださり、万事を益と変えて下さいます。どうか、あなたの御愛と御栄光が、この世界に漲り溢れますように。今、世界は混乱し、自分の事のみが良ければとの思いにとらわれています。どうかあなたの御独り子をさえ惜しまず賜わる愛、また、子のためにはいかなる犠牲をも厭わない母の愛が、この世に浸透しますように。どうか、私たち一人一人を御心にかなう道に歩ませて下さい。この祈り、イエス様の御名を通し御前にお捧げ致します。アーメン。